

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十八年七月十六日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説(能楽評論家 児玉 信)

狂言 柿山伏(かきやまぶし)

貝をも持たぬ山伏が道々嘘を吹こうよとは、いかにも狂言の似非山伏らしい登場です。柿の木へ登って柿の実を盗み食いする行儀の悪さ、畑主に見つかってなぶられ放題の間抜けぶり(動物たちの鳴き声や動作のまねはだれにも楽しい笑いの基本です)。修行を積んだ山伏なら鳶にもなると聞いたのに、飛ぶのをしくじってまだ産毛も生えぬと知ったとは、根が正直でもあるようです。その山伏の祈りの効験を結末でどう確かめましょうか。

能 井筒(いづつ)

諸国一見の旅の僧(ワキ)が南都七堂を経て初瀬へ向かう途中、在原寺に立ち寄り、業平と紀有常の娘の夫婦を弔います。そこへ思い出にひたり仏にする様子の美しい女(前シテ)が現れ、井戸の水を汲み薄の生えた古塚に供えて回向します。僧がその理由を尋ねると、女は業平への弔いと言いつつ業平との関係は否定し、それでいて昔懐かしさは隠せず伊勢物語で知られる二人の恋を語ります。夫が通う河内への夜道を案じた「風吹けば」の歌、幼なじみの恋を育て結婚を誓い合った「筒井筒」の歌で知られる物語を回想した女は、その井筒の女、または紀有常の娘とは自分のことであると明かして、井筒の陰に隠れます(中入)。仮寝する僧の夢に再び現れた女(後シテ)は業平の形見の冠・直衣を身に着けています。不在の業平を待ち続ける人待つ女は業平に移り舞い、業平の詠歌を反芻し、その姿を井筒の水鏡に映して面影を慕います。魄霊は花が匂いを残すように夢と消えます。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附

前シテ(里女)

鬘をつけ、鬘帯をしめ、増の面をかける。

後シテ(紀有常の娘)

覆懸をつけた初冠を頂く。